破壊神の産まれた日

秋月　実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破壊神の産まれた日

【Ｎコード】
Ｎ５４９２Ｙ

【作者名】
秋月　実

【あらすじ】
Ａｒｃａｄｉａのごちゃまぜボックスにも掲載しています。
ＶＲＭＭＯ異世界トリップの勇者の末路です。

美しい聖女が、歓声をあげる観衆の中、笑って手を振っている。聖女は遥か昔からこの国を守る者であり、皆に崇められていた。にこやかな笑みを浮かべつつ、聖女は決意していた。一月後に迫る約束していた儀式の時。今度こそ、約束を違えさせはしない。

もしも破られたら、その時は……。

少年法王は聖女が帰ってくると、涙で顔をぐしゃぐしゃにして駆け寄ってきた。聖女はそれを抱き上げる。

「サクラ！　帰るって嘘だよね、嘘だよね！」

「いえ、確かに一ヶ月後の儀式で帰らせて頂く約束です」

「サクラ、この国が嫌い？」

「法王様、いえ、リューク。約束は守らなければなりませんわ。私は、帰してもらう事を条件にこの国に仕えてきたのですから」

法王の問いに、サクラは笑う。

「この国を好きだからじゃないの？」

その問いに、サクラは少し困った顔で笑った。

「どう答えれば、帰してもらえるでしょうか」

「帰さない！　絶対帰さない！」

サクラは困った顔で微笑む。

「いけませんわ。約束は守って頂かなくては。リュークは、最も神力の強い、私を元の世界に返せる唯一の人だと聞きました。ここに残る以外の、あらゆる命令を聞きましょう。ですから、私を帰してください」

「絶対帰さないから！」

泣きながら法王は駆けて行く。困った顔で、サクラは見送るのだった。

「あの、本当に帰ってしまわれるのですか」

若い神官が、戸惑いつつ問う。

「ええ、そうよ？　早くママに会いたい」

落ち着き払った聖母のような口調だが、言っていることは幼い。

「御母上様は、女神様なのでしょうか」

「いいえ。普通の人間だったわ。でも、召喚したのと同じ時間に、記憶以外は全て召喚前と同じようにして返すと約束してくれた。……ようやく、帰れるのね。永かった。永かったわ」

神官は困惑する。時を操る呪文など、聞いたことがない。何より、

神の化身たる聖女が出来無い事が、何故人間ごときにできるというのか。
聖女が帰るという噂は、火のように広がった。
聖女にどうか帰らないでくださいと、民衆は、神官達は身を投げ出して願った。
そして、神官達は聖女に告げた。

「帰さない？」

「法王様のご決定ゆえ」

すまなそうに神官が告げる。聖女は静かに紅茶を飲んだ。

「そうですか……。わかりました。リューク様にお会いしてもよろしいでしょうか」

呼ばれた法王、リュークは、サクラにしがみつく。

「サクラ、僕、考えを変えないからね！」

サクラは微笑み、リュークを連れてテレポートした。
ついたのはできたばかりの港町だった。
雑踏の中、聖女は微笑む。

「リューク様、側で見ていて下さいまし……ファイアーストーム」

その瞬間、周囲は炎の渦に変わった。骨すら残らず焼け死ぬ周囲の人々。

「な、何をするの、サクラ！」

「何って、説得に決まっていますでしょう？　私を帰して下さいまし。千年に一度の儀式。私はもう、二回もチャンスを逃してしまった。最初は法王様の死。次は聖剣の紛失。今度は、いかなる失敗も許さない。……絶対に帰る。さ、行きますよ、リューク様。愛しの法王様。貴方の為に、この人達は死ぬのですよ」

笑って、サクラはリュークの腕を引っ張る。

聖女が美しい唇から言葉を放つたび、炎が、氷が、雷が迸った。

リュークは泣き叫ぶが、サクラはきつくリュークの腕を掴み、連れ回して港町を死の街に変えた。

「では、戻りましょうか、リューク様。そして、私を返すよう決定を下すのです。いいですね？」

リュークが青ざめた顔で泣きながら頷くと、サクラは優しく微笑んだ。

聖女と共に帰ってきたリュークの話を、初め神官達は信じなかった。

しかし、一週間もすれば知らせが来る。神官達は困惑した。

……なんのことはない。聖女を返す方法など初めからなかったのである。

……かつては、あったかもしれない。しかし、そもそも聖女には知らされていないが、神は遥か昔に去っている。

遥か遠くのアラキス地方では怪しげな宗教がしつこく残っているらしく、最近も世界破滅論なるものが勢いを増しているようだが、せいぜいそれぐらいであり、この世界は基本的にメアリア教一色、メアリア聖王国一国であり、聖女の権威で纏められているものである。

魔法は存在するが聖女ほど強力な者もない。

それでも、長くこの世界を守ってきた女神だから、多少は困惑するだろうが、帰れないという事をさほど問題視するとは思えなかった。極端な言い方をすれば、笑ってゆるしてくれると思っていたのである。

しかし、聖女は躊躇なく港町を焼いたという。真実が明るみに出れば、何が起こるというのか。

聖女は、死んでも少し弱くなって生き返るという。不老であり、不死なのだ。

そして、軍に匹敵する力。

困り果てた神官達は、法王に死んで貰うこととした。重要なのは、法王ではなく聖女である。

二日後法王は毒殺され、聖女の奇跡で生き返った。

神官達は、観念して巫女に土下座して許しを乞うた。

サクラは、微笑んだ。

「ふふふ……そうね、そんな事だろうと思っていたわ。でも、私は諦めきれなかった。諦め切れないの……。いいわ。もう、あなた達には頼まない。他の方法を考えるから」

聖女は真珠の涙を零し、テレポートで去った。

神官達はその事に胸を痛め……愚かにも、それで終わりだと思った。

新しくできた街で魔術都市以外。その条件を満たす街が、一日に一つ消えていったのだ。

聖女の手によって。

聖王国は直ちに聖女が魔に魅入られたと発表し、非常事態宣言を告げ、アラキス地方以外の魔術師の権威達が集められ、聖女の排除方法を模索する事となった。

アラキス地方の者達は、初めから来ることはなかったが、邪教を崇拝する者の事など誰も気にしなかった。

狂った聖女に人々は恐怖し、混乱した。より古い街、より魔術師達の集う街に人々は殺到した。

一方、アラキスを纏める領主リアルドは、疲れた顔で古き神とお茶を飲んでいた。

メアリア神ではない。かつて世界にいた十神の一人である。

かつて、十神は平等であった。それをメアリアの聖女召喚が覆した。

信仰は、神々の力となる。ほとんどの信仰をメアリアに奪われた残りの神々は、他世界へと逃げ出していたのだ。最も、逃げ出していたのはメアリアも同じである。

「どうやら、始まったようですね。サクラ様が闇に落ちたと報せが来ました」

『ええ。予想していたよりも遥かに遅かったですが、始まってしまえばもう止まらないでしょう。事が始まるのが遅かった分、彼女の力は強くなっている』

「……やはり、神々の手によってもどうにかできないのでしょうか」

『彼女は、既に神と化しています。信仰のもととなる、この世界の全ての人々を殺し、人を傷つけることをやめて、やっと力が蓄えられなくなる。信仰を受けても、生物を屠っても力は蓄えられますからね。誰もいない世界で遥かな時をおいて、弱まった頃に神としての力を徐々に削っていく。これだけ手順を踏んでも、まだ危険です。とはいえ、私達も彼女をそのままにしておくつもりはありません。あのままでは、あまりにも哀れすぎる。私達が責任持って彼女を人へと戻し、記憶を消し、輪廻の輪に戻します。……少なく見積もっても、一万年。いえ、一億年はかかるでしょうね』

「メアリア様は何かしてくださるのでしょうか」

『何も。あの女は何もしない。そもそも、メアリアがようやく危機に気づいて力を取り上げようとした時には、全てが手遅れだった』

リアルドはため息をついた。

『それどころか、完全にこの世界を見捨てて、必死になって新たな世界で布教を行なっていますよ。幸い、聖女が集めた信仰の力がありますからね。メアリアは滅びることはないでしょう。この世界が滅んでも』

「貴方も見捨てている」

『否定はしません』

今度は、二人揃ってため息を付く。

聖女の住む星はとうに戦争によってなくなっている。時を巻き戻すことは神ですらできない。まして、サクラは神を凌ぐほどの力を手に入れてしまった。力を奪うことは簡単にはいくまい。

始まりは、メアリアのほんのお遊びだった。

勇者召喚の際、適当に選んだ女の子に、適当に選んだＭＭＯとかいうゲームの力を与えた。

それだけだった。

彼女は以下の能力を持っていた。

・スキル・転職システム

・不老

・死んでも若干弱くなって復活

レベル１の、子供より更に無力な少女。こんな者は勇者でないとあっという間に慰み者にされた後に捨てられた少女。

彼女は死ななかった。死ねなかった。
永き時を生きて、彼女は徐々にレベルを上げていった。元の世界に戻る為に。
そして、女神は力の上限を設定しなかった。
少女はいつしか、一軍に匹敵する力をつけた。
後に、その力に目をつけた聖王国は、いう事を聞けば帰してやるとサクラを騙し、非道を行い、その力を持って永い時間をかけて世界を統一させた。
他の神々はしきりに彼女を人へと戻すように言い、サクラに接触しようとしたが、メアリアは集まる信仰心に大喜びで、それを聞き届けないどころか、全力で邪魔をした。五百年して、聡い神がそっと他世界へと本拠地を移動した。
それから次々に神が逃げていくと、メアリアは更に有頂天になった。
しかし、千年ほど前、ようやくメアリアも気づいたのである。
サクラが既に自分の手を離れてしまっていることに。
サクラは、その時既に願い叶わぬその時は、世界の人間を全て滅ぼす事でメアリアを滅すと決めていた。
その野望に気づいたメアリアは急ぎ力を取り上げようとし、出来ず、逃げ出したのである。
静かに最期を待つ信者と、それを見守る神。
聖女がアラキスを訪れるまで、１０日もないと知っていた。

聖女の進軍は続く。続く。続く。

そして、約束の一月後、ついに聖都へとついていた。聖都は、小さな村々を除けば最後の街である。

「さあ、リューク様。私は殺せません。ならば、約束を守って元の世界に返す以外に、貴方の生きる術はない」

聖女サクラは、あくまでも優しく微笑み、静々と進んでいく。その周囲には死体が転がっていた。

「あ、ああ……。知らない、僕は知らない、許して、許して！」

「その言葉、私は何度言ったでしょう」

遠い目をして、聖女は笑う。

「犯されることは当たり前。乱暴も当たり前。首輪を付けられたわ。獣と交わらされたわ。不死の秘密を探るのだと実験され、何度も何度も殺された。媚薬、毒、酸、小便、精液、なんでも飲んだ。たくさん、たくさん殺したわね。私自身がされたのと同じほど、拷問も行った。全部、聖王国の命令でね。でないと帰さないって言うから。この地獄のような世界から、汚らわしい人たちから、どうしても離れたかったから。こんな世界で転生するなんて、こんなにも穢らわしく醜い人達の子として生まれるなんて地獄だから、帰りたいとも何度も言ったわ。そのたびににやにや笑って、いう事を聞けば帰す、そればかり。それが、帰す約束の時期の五十年くらい前になるとちょっとだけ優しくなるのよね。それで全ての罪が許されると思っている。思っているんでしょう？」

リュークはふるふると青ざめた顔を振った。

聖女は、優しく微笑む。聖女のように。

「いいわ。許してあげる」

そして、聖女はリュークに手を伸ばす。

「殺すだけで許してあげる。帰れないことを、三千年の孤独を、殺すだけで許してあげる。そのかわり、一人も逃さない。この世界の人々を全て殺し、信者を全て消す事でメアリアを殺す。そうすれば、きっと私は死んだままでいられる。穢らわしい人達の間に産まれることなく、死んだままでいられる。……ようやく、死ねる」

リュークの首をちぎりとり、怯える神官団に聖女は目を向けた。
サクラが全ての人間を殺し終えるまで、一年かからなかった。
そこで、神々の予想もしていなかった事が起こる。
スキルの一つ、サーチ能力が他世界まで広がったのだ。
サクラの力は、未だメアリアとつながっている。
故に、メアリアの信仰のある世界を感知できた。
そして、感知ができたなら、ランダムジャンプという、まだ見ぬ街にランダムで移動するスキルがある。
ゆえに、彼女は、飛んだ。

（後書き）

プロット

極秘裏に異世界の魔王の元いた世界に送り返す罠の魔方陣を張り、魔王と対峙する皇帝。
皇帝「何故世界を滅ぼそうとする！？」
魔王「家へ帰りたいからだ」
皇帝「！？」
魔王「拉致られ殺され陵辱され帰りたければいう事を聞けと無理やり非道を行わされてきた。会った奴は全員、帰りたいならいう事を聞けといってきたが、本当だったことはない。もう嘘はたくさんだ。住人をすべて殺して自分で戻る方法を調べる」
皇帝「あの。こちらが帰る魔方陣でございます。どうぞお入りください」
魔王「！？　あ、ありがとう！　そうだ、お礼に持っていた強力な武器全てくれてやる！」
皇帝「いらない。過ぎたる力は災を呼ぶから。早く帰れ」
　魔王帰る
皇帝「召喚した国どこか探せ。とりあえずぶっ殺す」
部下「はっ」

後、魔王が最初から帰る方法があったのだな、なのに誰も教えてくれなかったのだなと泣きじゃくったり、レベル一の時から苦労した様子の回想があったり。
実際書いてみたら全部カットしちゃいましたが。
よろしければ感想欲しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5492y/

破壊神の産まれた日

2011年11月17日12時04分発行